

名古屋市

西部地域療育センターだより

No. 39

正面壁画「友情」より

平成30年度 西部地域療育センター連続講座（平成30年6月22日） 発達障害の子どもの家族支援を考える

名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 坪井 裕子 教授（臨床心理士）

名古屋市立大学で臨床心理コースが立ち上がりました。私はそこで臨床心理士の養成をする教員として現在働いています。また、臨床心理士として療育センターや児童心理治療施設での現場の経験もありますし、大学の教員となっても児童養護施設や巡回相談として、いろいろな保育園にも行かせてもらっています。今日は発達障害の子どもの家族支援というテーマでお話ししたいと思います。

お話しする内容は、発達障害のある子どもの子育て、基本的な発達障害の特徴と育てにくさというところを軽くおさらい程度にふれて、保護者との関わりのポイントについて経験も交えて少しお話しします。今回の話が、発達障害を抱えた方と関わる際の一助となれば幸いです。

まず、発達障害の中で皆さんと関わりが多いのは自閉スペクトラム障害（ASD）です。もともとは1943年にカナーが「早期自閉症」として報告した

のが始まりで今から75年前のことです。男子に多いと報告されています。文部科学省の定義では3歳までに現れ、他人との社会的関係がうまく作れない、言葉の発達の遅れがある、興味や関心が狭く特定のものにこだわる行動があるとされています。『中枢神経系に何らかの機能不全があると推定される』と文部科学省は言っています。何らかのところがミソで、どの部分がということはまだ医学的には分かっていません。『推定される』と、はっきり分からないという表現にとどまっています。

DSM-5というのを聞かれたことがあるかと思います。これはアメリカの精神医学会の診断基準で、これによると、ASDは社会的コミュニケーションの問題と興味の偏りやこだわりといった常同性的の問題という大きな2つの特徴があるとされています。このうちその特徴がはっきりとしている人を「自閉症」と呼んでいただろうと思います。知能が高いものが「高機能自閉症」、言葉の遅れがないものが「アスペルガー症候群」と言われた時代もありました。今は、診断基準が変わってきていて、DSM-5ではスペクトラムという考えが主流となっています。普通の人の中にも偏りがあったり、ASDの方の中にもグラデーションがあるというふうに概念が変わってきています。

乳児から幼児の場合をみると、どのような特徴があるのでしょうか。保健センターの健診では言葉が



遅いと割合早めに気付きます。言葉の遅れだけでなく、平板なイントネーションやオウム返し、遅延反響言語（遅れてくるオウム返し）のあるお子さんもいます。言葉があっても、コマースのセリフや場面に合わない自分の好きなフレーズを言って会話にならないということも、よくみられる特徴です。赤ちゃんの時から気になるということでは、視線が合わない、呼んでも振り向かない、生後8~10ヶ月頃に本来あるはずの人見知りがないということもあります。指さしをしない、取ってほしい要求のある時に指さしをせずにクレーンという人の手で操作するやり方をするお子さんもいます。こだわりもいろいろパターンがあります。たとえば、物の位置や順番、形や文字、物を並べるなどです。感覚過敏のお子さんもいて聴覚や食感や触覚…ちょっとした音がうるさく感じるとか、食べた感じで好き嫌いがあるなど、偏食のあるお子さんの中にはこだわりからくるものもあるようです。同じ服ばかり着たがるのも触り心地からくることもあります。

アスペルガータイプの方は知能が低いわけではなく、幼児期ではなかなか分かりにくいです。言語的な部分で、質的な問題がありますので、言葉のニュアンスがうまく読み取れない、言葉をそのまま受け取ってしまったり、比喩の理解が難しかったりします。また、ものすごく難しいことができたりする反面、こんなことができないの？ということがあり、賢いけれどバランスが悪いという、能力にアンバランスさがみられます。本人は知能が低いわけではないので、自分はまじめにやっているのに周囲はそう受け取らない、どうも違うということは分かるけれど、何が違うのかということが分からず、どうしたらいいのか分からないということがあります。ASDの方への対応ということで、実際現場でもされているかと思いますが、得意なことはパターン化されたことになります。逆に言う所想定外のことは臨機応変に対応したり、柔軟に対応したりするのは難しいとされています。刺激を少なくし、情報処理を単純化しましょうといった構造化をすることがよいとされています。聴覚より視覚のほうが得意な方が多いので、目に見えるわかりやすい示し方をするとか、何かやるにしても一度にたくさんいろいろな指示では混乱してしまうので、今やることはこれだと示すことがいいとされています。こういう特性を持っていると、親からするとどんな感じがするのでしょうか。視線が合わない、呼んでも知らん顔をされてしまうと関わりが持ちにくいです。親からするとさみしい感じがします。「ママ」と言って、寄ってくる子はかわいい感じがしますが、誰でも関係ない様子で人見知りしない子だと、例えばスーパーで呼んでも振り向かない状況に、一体なん

なんだと思ってしまうこともあるでしょう。言葉が遅いということだけでなくコミュニケーションの取りにくさという特性により、会話になりにくい、知能はあっても相手の意図を読み取れず全然違うことをしゃべっているなど、相手との気持ちのやり取りが難しいということになるのです。自分が頑張っても、育てにくく分かり合える感じがしないという困難さがあると思われます。

次に注意欠如多動性障害をみてみましょう。AD/HDと省略された言い方がよくされますが、小さい時から割合わかりやすい症状を持っています。DSM-5の基準で言うと、以下の要件を満たすこととなります。不注意の基準9つのうち6つ以上、または多動性・衝動性の基準9つのうち6つ以上、そのどちらかが6ヶ月以上継続すること。12歳以前の発症。2つ以上の状況（家と学校など）で臨床的に著しい障害があること。統合失調症や他の精神病性障害の経過で起こるものではなく他の精神疾患では説明されないもの…を言います。

AD/HDには3つのパターンがあり、不注意優勢型の子は、多動ではないが気が散りやすいということがあります。このため、学校に入ったとき忘れ物が多いので注意されやすかったりします。自分では忘れ物をしようとしているわけではないので、極端にいうと自己評価の低下となりやすく不登校になることも、珍しくはありません。多動・衝動性優勢型の子は小さい頃から多動・衝動性が目立ちます。成長とともに多動はおさまってくるとは言われていますが、不注意型や混合型に移行する場合があります。混合型は不注意と多動・衝動性が混じっているタイプで、AD/HDの中では一番多いと言われています。落ち着きがないので行動上の問題や、ちょっとしたことでかっとなりやすいので友人関係の問題を持っています。対応によっては思春期以降に非行という行為障害に発展する場合があります。全員がそうなるわけではありませんが、早めに気付いて早めに療育をしていく必要性があるのです。このあたりも復習になりますが、AD/HDの方への対応の基本は、どちらが優勢なのかタイプを見極めた働きかけをすることです。どちらにしても情報が複雑になると、処理が難しくなるため、余分な刺激を減らしシンプルにすることです。不注意タイプにはリマインドがお勧めです。例えば、「忘れ物ない？」と聞いたときに、「ないよ。」と返事が返ってきても、「〇〇あるかどうか確認したら？」ともう1度チェックすることです。『～やってね』をもう1回チェックすることです。小学校高学年になってくると自分で忘れ物がないか確認する、チェックリストを活用することもいいですね。多動・衝動性優勢タイプにはコントロールがキーワードになります。薬もいろいろ出て

きているので、お薬を飲むことで落ち着いてくる子もいます。私が担当した子の中に、薬を飲んだことで、「今日は、学校で1回も怒られなかった」と報告してきた子がいました。今までそんなに怒られていたのかと思いましたが、今までは先生の声が頭を通り過ぎて聞こえていなかったそうですが、先生の声が耳に聞こえてきたので頭に入ったと言うのです。今までも耳には聞こえていたけれども、『何ページ』の部分とか、『何をやる』という部分が、とんでしまうので、先生の意図とは違うことをして叱られていたということです。お薬が効く子には有効だと思えます。ただ、例えばご飯が食べられなくなったなどの副作用がでる場合もあるので、主治医と相談するとよいと思えます。

AD/HDの特徴はお話ししましたが、本人に自覚してもらい、どのように対処していくかが重要になってきます。整理整頓が苦手だったり、自己コントロールが弱かったりするという特徴があるからです。本人が自分自身でコントロールすることは、幼児だけでなく大人にとっても難しいことです。環境を整えるということは、周りの人が理解することも含まれています。小学校高学年以上になれば、本人が自覚していることで、カバーできることもあるのです。知能が高い場合、思いついたことをすぐにやってみたりするので、生産性は高いのですが、それはそれでいいことですが、ミスも多いのです。それをどうカバーするのかということです。その時に自分でもう一度チェックする「ダブルチェック」の癖をつけておくことが大事です。リマインドもいつまでもお母さんにチェックしてもらうわけにはいかないので、自分でどうやってリマインドするのかを覚えていくのです。これは小学校高学年や中学生くらいになれば覚えていけるといいでしょう。例えば宿題をやっているとき他のことが気になってしまい別のことをしてしまう場合は、タイマーをかけておいてタイマーが鳴ったら何をやるのか思い出すことがいいでしょう。最近だとアラームの付いた携帯もあります。アラームが鳴ると思い出すという仕掛けにしておかないと、あっちいたりこっちいたり気が散ることになります。リマインドもどういう音は嫌か、どういう音なら思い出しやすいのかと、その人によって変えていくことが必要です。リスクアセスメントは幼児のような小さい子には難しいですが、親御さんが考えておくことによいです。忘れ物をしたらどうしよう、とパニックになるのではなく、忘れ物をしたけれど、先生に言って教科書を貸してもらおう。忘れ物をしたけれど隣のクラスの友だちに言って貸してもらおうという対処方法をあらかじめ決めておくのです。失敗した時にどうリカバーするのか。間違えやすかったり、失敗しやすかったり、忘

れ物しやすかったりと、自分はできないし失敗も多いと思込むのではなく、そうってしまった時にどうすればいいのか、選択肢をたくさん教えておくと、失敗しても次の行動に移せるので、パニックにならないと思います。忘れ物をしても貸してもらおうとか、同じ教科書を2冊学校と家に置いておくとか、教科書全部を毎日かばんに入れて持ち運ぶ、という子もいました。これはかばんが相当重いのですが、絶対忘れないという安心になります。このようにその子その子によってタイプがあるので、そのへんをどのように対応するのか親だけでなく先生とも相談して決めていくとよいと思えます。このようにリスクアセスメントをしっかり持つておくことも大事です。

ASDやAD/HDの共通のポイントがありますが、それは1人1人の特性を知ってもらうことです。個性と言われることもあります。ASD、AD/HDと言ってもタイプが違ったりするので、そのタイプの中のどなたとどこに困っているのかを確認するのが大事なのです。どうしてもできないこと、ダメなところに注目がいきましがちですが、好きなことやできることという得意なところや興味のあるところにもちゃんと目を向けてもらえると、それはその人の強みになります。〇〇は苦手だけれども□□は得意というのがあれば、自信や自己肯定感につながります。やれることがあるのは、本人の強みになり、将来仕事をしていくときにも、その人の得意なところで勝負できるのです。もちろん苦手なところをカバーすることも大事ですが、得意なところもちゃんと見ておく。このことが大きくなったときに役に立つのです。親とどういところが苦手とか、どういところが得意とかは確認しておく、親が自分の子はダメなところばかりではないと、子どもに対する見方が変わっていくことにもなります。

親御さんとの関わりについてですが、いろいろなタイプの方がいるかと思えます。さまざまなタイプの親がいる中でどのように考えていけばいいのでしょうか。

まず、学校の勉強や授業の中で親のなり方を習っていません。もしかすると発達心理学や乳児の保育の中で、親との関わり方に関し、授業では出てくるかもしれませんが。子どもが生まれたところから親がスタートするので、最初からベテランのお母さんはいないはず。お父さんお母さんは子どもの成長とともに、親歴・保護者歴というのがスタートするので、最初は皆さん試行錯誤していると思えます。いろいろな親がいろいろなやり方をしている。もちろん自分が子どもの時どうだったかを参考にしながらです。自分がいやだったとか、よかったところを含め、自分がどういう親になるのか、赤ちゃ

んが生まれた時に考えています。子育ての援助者は実家の親だったり、近所の友人、兄弟姉妹というところになりますが、ベテランの親になる途中の段階、すなわち最初の段階ではその援助者の有無が大事になります。子育ての不安は、発達障害があるかないかに関わらず、誰にでも起こるものです。難しい子ども（反応の乏しい子、落ち着きのない子、過敏な子など）は育てるのが大変です。周囲のサポートがあるかないか、例えば家族の中で関係がうまくいってれば、父と一緒に手伝ってくれる、協力者という意味では実家の親が面倒をみてくれる、こういう人がいると助かります。難しい子どもを育てていると親も精神的に落ち込みやすかったりします。育児雑誌や教科書的なものを見ると『～歳頃にこういうことができます』とあるので、がんばってやっているのに思うような反応が返ってこなかったりすると不安が増します。よくお母さんが言われるのは、母子手帳の『こんなことができますか？』に、『はい』と『いいえ』と書いてあるのを見て、『はい』がなかなかつけられなくなってしまう。自分が悪いのかなと思ってしまう。自分がダメなのだと思うことが、だんだんと子どもがかわいくないという気持ちになってしまいます。それが子育ての失調や、極端に言えば虐待のおそれということにも、つながる可能性があるのです。その時、サポートが重要な意味を持ちます。身近にサポートできる人がいればいいのですが、転勤族だったり、実家に頼れなかったりという人もいますので、公的機関に限らず民間でもいいので、地域の中で子育て支援のサポートがあるのは、大変大事だと思います。

家族の支援をする時に、見ていくポイントはやはり、子ども1人というわけではなく家族全体のバランスを見ていくことです。発達の遅れや発達障害の子どもがいる時に、子1人ならその子に全力を注ぐかもしれませんが、他に兄弟姉妹がいるとなると、なかなかバランスの取り方が難しくなってきます。夫婦関係も円満ならいいのですが、うまくいってなかったり、シングルファーザー・シングルマザーだったりすることも最近はあります。実家との関係、夫の実家との関係もうまくいっているかないかで違います。そういう意味で協力者がいるのかということになります。子どもの貧困も問題になっており、経済的にどうか、生活的に苦しくないのかも見るべきポイントです。精神的に追いつめられて…という方もいる。地域とか周囲の環境要因も関係します。集合住宅なのか一軒家なのか。周りと良好な関係が築かれているのか。孤立しているのか。親自身、メンタルも含め具合が悪いところはないのか。家族全体のバランス、いろいろなところを見ていくという必要があるのです。

子育てを取り巻く様々な状況を確認した上で、どんなふうに関わっていくのか。私は療育センターの仕事の経験もありますが、保健センターの1歳半健診で気になるお子さんの事後フォローの教室にも行ったことがあります。療育センターに行く前の段階で親子教室に行ってみないかと勧奨することもしていました。1歳半や3歳の時の健診で保健師に言われたとしても、全然発達のことを気にしたことがない方、あるいは気にしたことがないように見える方、気にしているが気にしたくない方、直視したくないという方もいます。妊娠中に何か変な物を食べたのかと思ってしまう親もいます。誰か、何か、のせいにしたい、療育センターに行くよう伝えたら世間の目が気になってしまう方もいます。気になる子どもに声をかけて助言すると、「こんなに頑張っているのに何で？」となります。面倒くさいから行かないとか、何でうちの子だけやらないといけなの？と誰に向けていいのか分からない怒りを持ってしまう方もいます。さまざまな気持ちをいろいろな場面で抱えているのです。私が相談して来た中で見えてきたものは、次のようなことです。子どもがなかなか言うことを聞いてくれない、落ち着いて席に座っていられず、どこかへ行ってしまおうような状況で、だんだん子どもがかわいく思えなくなってきたなど、若いお母さんの中には自分がまだ未熟なのに親になってしまったという方もいらっしゃいます。どうしていいのか子育ての基本がわからない、年齢相応の発達というのがよくわからず、さらにその上発達障害と言われてしまった場合は、何が普通で何がどうなの？とすべきことがよくわからないという方もいらっしゃいます。無理な要求をしてしまうので、例えば1歳の子におむつをしているのは遅いと思っておむつを外して失敗したらひっぱたくとか、席に座っていないのは発達障害の特性とも言えるのですが、席に座っていないと怒りがこみあげてくるとか、そういう特性と言われても怒ってしまう方がいます。発達障害の傾向があるお子さんに対し、何が適切で、何が適切でない対応なのかよくわからないのです。スーパーで子どもが走り回っている、世間の目は、あの親は何をしているのかと見られてしまうこともあります。発達障害だと、外見上はあまりわからないので（普通に見えてしまうので）、親のしつけが悪いと見られてしまう、そういう目で見られるのが苦しいと感じるということもあります。

このような相談を聞いた私が思ったことは、子育てがうまくいっていない、難しいということ。教科書通りにいっていないことに引け目を感じていたり、悪いのは自分だと思ったり、自分が責められていると思ってしまいます。このため、実際、相談を受ける時には、親の言い分をしっかりと聞くことを

心掛けています。まずは、親が気になっているところを聞く。これはあたりまえのことですが、たとえ、ずれていても、「そこじゃなくてここでしょ」と言わず、まず聞く。実際、母の心配のポイントが全然違う場合、「他に心配な点がありますよ」と言いたくなる気持ちは分かりますが、そこで母の心配は違うと言ってしまうと母は自分が否定されたと思ってしまう。このあたりは難しいところですが、ここが気になっていると母の言っているところをまず丁寧に聞く。そこから徐々に本題（今、心配したほうがいいところ）に1つずつもっていく。最初から一番心配なところが援助者と一致する人もいれば、ポイントがずれている人もいる。ここは最初の入口として丁寧に聞くことです。「(家では)困ってないです。」という人もいる。保健センターの健診後のフォローでも「別にないです。」と言われる人もいますが、「ごはんはどんなふうに食べますか?」「トイレはどうですか?」「どんな遊びが好きですか?」といういろいろ聞いていく中で切り開いていきます。具体的に話を聞いていると、「遊んでいる時はいいですけど、ごはんの時はできない。」と言われるので、そんな時はどうされているのか聞いてみると、「ごはんは食べないので、ずっと遊ばせている。」と返答がありました。子どもの好きなようにさせているから困っていないのです。具体的に話を聞きながら、出てくるところを拾っていきながら、あまり困っていないかもしれないけれど、このへんがポイントになるかもしれないと親と共通理解が得られそうなところを入口にしていくのです。専門家の目から見ると大事だと思われるところを最初から言うのではなく、親が困っている、気になっている、困っていないと言われてもどんなことがありそうか、少しずつ引き出すのです。納得できそうなところで、もう少しこんなふうになればお母さん楽になれそうかな、もっといいかなと共通理解の得られそうなところをベースに、そこを入口にしなから相談にのせていくと話がしやすくなるかなと思います。

私がよく気をつけているのは、助言とか指導のような『～してください』というのを言い過ぎないことです。これはとても大事にしています。言い過ぎはプレッシャーに感じると言われる人もいますからです。コミュニケーションが取れない、言葉が遅い子どもだったりすると、「もっと声をかけてください」と大抵言われます。そう言われたけれどもどう声をかけたらいいのか、声をかけても話しかけても呼んでも子どもに知らんぷりをされてしまうこともあると思います。相談先で言われたことがプレッシャーとなり相談にもう行きたくないとか、健診に行くと何か言われるので行きたくないとか、行かないといけないとは思っているけど行きたくないということ



を聞きます。困っているのだと分かった上で、じゃあどんなふうにしていくといいかという雰囲気だと、何がどう困っているのかがよく見えてくると思います。

実際に相談の場所でどんなことがされているかということですが、単なる知識や情報ではなく、例えば、〇歳ならこんなことができそう、これを要求するのはまだ難しいという具体的なやり方、こんなやり方があるなど選択肢を幾つか紹介してみせたり、親によっては、やれそうなこととやれないことがあると思うので、個別にゆっくり話を聞きます。どんなふうやっていけるか、これは難しそうところを丁寧に聞いていくことで、ここなら相談してもいいという信頼感や安心感が生まれます。親を責めないところが大事です。子育てをしていくにはいろいろな力が必要ですが、父母だけではなかなか難しいです。特に発達障害のお子さんだといろいろな力を要します。サポートを上手に受けられるような援助をしていく。このへんが日本人だと特に、なるべく人に迷惑をかけないという風潮があり、自分のことは自分でしなさいと言われて育ってきている人が多いかと思います。人に迷惑を掛けてもいいとは誰も言われていないからです。発達障害などの難しいお子さんを育てている親も、なるべく人に迷惑を掛けないようにしたいと、あちこち頼ってはいけないと思っている方もいます。サポートを受けることも力となります。

私がよく言っているのはこんなことです。受けられる援助はいっぱい受けていいとか、使える制度は何でも使っていんだという雰囲気です話をしていくと、じゃあ相談していいんだ、～に通っていいんだ、困っていると言っていんだとなります。特にハイリスクなタイプ、リスク要件の多い家庭(経済的に不安定、家族の不和、地域で孤立など)には心理教育的アプローチが必要となります。心理教育的とは、自分で頑張ったり、何とかするだけでなく、困っていたら助けてと言って大丈夫ということをお伝えしていくことです。助けてと言えるのも一

つの力です、これが心理教育的なアプローチです。

実際に相談の場面(保育園や大学の相談室などで)での事例を加工してお話します。0歳で保育園に入園した子ども…0歳で入園すると入園すぐには発達の問題に気付かず、1歳くらいから発達が気になると保育士から相談があったケースです。それなりに園の生活にも大きく外れることなくなじんではいるが、言葉の遅れやマイペースなところが気になる、親は心配は全くしていない、ということでした。保育士の相談で園に行き、療育センターにつながるといって助言しました。1歳児だったため医師によってはまだ早いと判断する場合があります。しかし、様子や動きなど見ていると、療育センターにつながった方がいいと思われるケースでした。園の報告で、マイペースなお子さんのため、こんなことがあったと伝えても、親は「そうですか。」で終わる、発達障害を疑うケースだがどのように親に話をすればよいのかと相談されました。まず親と保育士が話をする機会を設け、そこでマイペースなところがあり、どんなふうに保育すればいいのか保育の参考にしたいので一緒に相談に行ってくれないかと言ってみるよう話をしました。園の先生が困っているんだと思われるので、親御さんは受診に承諾されました。療育センターに行くに発達検査では能力にでこぼこがあり、医師からは、「よく早くに気付かれましたね。」と言われたそうです。親も「1歳ならこれからいろいろやると伸びていく」と言われ、発達障害と落ち込むのではなく、早く気付いてもらえてよかったという気持ちになったということです。そのおさんは3歳、4歳、5歳と進むにつれ発達障害的な特徴が出てきて、知能は高いのですが、文字にこだわり、先生が絵本を言葉通りに読まずに雰囲気でも盛り上げようとしゃべると「絵本どおりじゃない」と怒るような感じでした。0歳から入っていることで早めに分かり加配の先生もつけて親も加配制度のことを知り、手厚く見てもらえるのでありがたいとなった、うまくいったケースです。途中で(発達障害と)気付いた時どうつなげるのか、なかなかうまくいかないことは多いです。発達が心配だから相談に行ってくださいだけでは相手に伝わりません。保育の参考にしたいというのは1つの有効なパターンかと思いません。

次に親子教室を紹介されたのですが、全然納得していないまま参加しているというケースです。お子さんは言葉の遅れがあり、親のひざから離れることができず集団の中にも入れないという状況でした。親は引越しという環境変化があり、親から離れられないというのは仕方がないと思っていました。発達障害の診断は受けていません。親子教室に行くよう言われたから来ているだけといった雰囲気の方でし

た。最初、親のひざから動くことはなく、手遊びやお絵かきなどいろいろなことにも全くのりませんでした。しかし、ある時、絵カードのマッチングで気に入った絵カードの出現により、それをやっている人(セラピスト)のひざにのったのです。それを見て親は、「初めて他の人のひざの上にのった、それまでは誰か他の人に寄っていくとか興味を示したことはなかった。」と言われました。それまで、親は来たくないのに…という雰囲気を毎回醸し出し、お子さんも声かけしても知らんぷりという状態でした。絵カードの『ぺったんこ』課題の時のお子さんの様子を見て、初めて親が自分の気持ちを言いました。それからは親の態度も変わってきました。薄々は「うちの子、何かあるのでは?」と思っていたけれど素直に言えなかったようでした。初めのころ、親は機嫌悪そうにしていたのですが、この親子教室は欠席しませんでした。お子さんの興味を示すものが広がってきて、お絵かきをしたり、親以外の大人の声かけを聞いたり、抱っこを求めるといった反応も出てきて、来たくなかったけれど来てよかったと言われるようになりました。発達検査や診察も今までは、「人に慣れないのはしょうがないから。」と言って受けないままになっていましたが、「検査とか受けたほうがいいか?」と聞くようになりました。いろいろな地道な関わりで、親の気持ちも変わってきたようです。お子さんの変化を見て、また変わっていくということも体験しました。このように、今は納得できないかもしれないけれど、まずお子さんにできることをやっいていこうと示すことで変わっていくこともあるかと思えます。

最後はポイントがずれているケースです。ある保育園で相談にのった方ですが、保育園では興味ないことに全然集中しない、落ち着きなく指示に従えない、どう接したらよいのかとのことでした。親は家では困っていない、強いて言えばひらがなが書けないことが困るとのことでした。園は「そこの?」とびっくりという具合です。年齢からして、まだひらがなが書けなくても心配ではないのですが、困っているところがずれているというケースです。ひらがなが一番気になるなら、「あ」の字はどう書きますか?縦棒と横棒、まるの形もありますか、お絵かきではどうですか、と聞いてみました。親は「お絵かきやっているのは見たことがない。」と言います。鉛筆やクレヨンはどう持つか?スプーンやはしは手(持ち方)が似ていますがどう持っていますか?と尋ねると親はうまく答えられませんでした。ひらがなに行き着くまでに、いろいろな道のりがあるということに親は気付いたようです。そこで、ひらがなを書けるようになるといいけれど、今、どんなことができるかとひらがなが書けるようになるのか一緒に

考えてみましょうとなりました。保育園でお絵かきは？興味あることは集中できる？得意なところ不得意なところがある？とか、気が散ってもどんな声かけで戻ってこれるかなどと、1つ1つ具体的に保育園の様子を聞きながら、「園ではこうしているので家でもやってみますか。」とすり合わせしながらやってみることになりました。今やっていることがひらがなに通じているという道筋がわかると親も納得するようです。最初ピントがずれていたけれども、親の中でストーンと落ちたようでした。ひらがなのためならまずここから、というのが保育園の先生との一致するところ、そこから取り組みをやってみようということになったのです。熱心で一生懸命な親は、保育園の他にもいろいろ習い事とかさせたいと思い、週に何日も通わせていました。しかし、保育園に遅刻したり主活動に眠たくなってしまったりと本末転倒になり、少し整理をしました。一生懸命だけれどポイントがずれる親には、ダメと言うのではなく、どんなふうだったらやれそうかに着目します。朝起きられないのは前日疲れていたのではないかと何回もすり合わせをするうちに、生活リズムを整えることも必要であるとか、しっかりご飯を食べること、保育園に毎日決まった時間に登園することも大事ということが分かれると、親もそこが大事なんだと納得されます。少しずつ、ずれを修正しながらやっていくとずれも小さくなり、子どもも成長し発達することで、保育園にも1つずつ必要なことを相談していき、共通の理解をしていくことができると思います。

まとめにかえてですが、理想としては親が子どもについてよく理解し、しつけや生活習慣など子どもへの対応もバッチリ、というのが理想ですね。子どもの気持ちをちゃんと大切にしている、保育園など子どもに関わる先生とも連携がスムーズ、療育センターや医療機関などの専門機関を上手に利用して無理をし過ぎていない、親子ともども楽しく過ごせているようなことがあったらいいなと思います。これはやはり、親が子どもの一番の理解者となり子どもに関わる全ての人とうまく協働できること、つまり、みんなとうまくできるのが理想なのです。もちろんうまくいく人ばかりではありません。親としては、いろいろ考えてはいるものの上手にできる人とできない人がいます。適切に対応できない人もいます。そういった人にどう対応するのか、早めに診断も受けていなくて、療育につながっていない人は、本人は生きづらさを感じ、親は育てにくさを感じていることが多いと考えられます。なかなかつながれない、孤立しているという人が一番難しいと思います。孤立させない、そういう親子がいることをキャッチする仕事についている人（保育園や保

健センターなどで働いている人）は、地域の人もそうですが、専門機関の療育センターや医療機関にどういうふうにつながっていきけるかがポイントとなります。いろいろな所と連携することが大事で、難しい人ほど1人の人に負担がかかると大変です。経済的な問題や病気を抱えている親には福祉的な制度（手当や手帳）などを勧めるといい場合があります、区役所の窓口と一緒に相談に行けるような雰囲気があると連携がスムーズになります。使えるものは使ったほうがいいと思います。親子を孤立させないために誰か1人キーパーソン（保育士や保健師、相談員など）を作り誰に相談していくか、つなげていくかを考えるといいなと思います。もちろん親へのアプローチには課題があります。保健センター、保育園、療育センター各所では様々な工夫がされていると思います。しかし、なかなかのってこれない人もいます。特に難しいケースだと積極的に「療育センターに行きます」、「相談に行ってください」とは言えない人もいます。うまくいかないこと、うまくいったこともどんなふうにしたらうまくいったのか、どんなふうに関連したらよかったのかということ積み重ねていく必要があります。特に福祉的なケースはどういう手当や制度を使ったらうまくいったということ、ケースワーカーも含め検証ができると思います。

重要なポイントとして発達障害の特徴を理解して対応する人は増えていますが、地域の人や当事者の知人等を見ると、まだまだ普及が十分ではないかもしれません。発達障害の特性（得意なところ不得意なところ）、その対応など、どんなふうになればトラブルにならないか、解決できるのかと、発達障害を理解して分かった上で対応すると、それは、本人にとっても地域・社会にとっても大変有意義です。早めに分かり手を打てば、あまりにも大変なことにはならないということも多いと思います。世間で何か事件があり、発達障害という言葉が出てくると親はとても傷つきます。その事件を起こした人がどう育てられたかはわからなくとも、マスコミを通じて発達障害という言葉が一人歩きをしてしまうことがあります。発達障害の人はこうだと言われることを防ぐためにも、早め早めに気が付いた人が手を打っていくのがいいのです。早めにやることにより、社会の中でも発達障害が多少あっても普通に生活できるということになり、それにより周りも早めに気付いて対応していけば問題ないんだと、そのあたりの理解が今後もっと増えるといいと思います。本日の私の話が、少しでも、発達障害のお子さんと親御さん、その親子にかかわる先生方のお役に立てれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

平成30年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

※ 定員になり次第締め切ります。

第2回 講演会

「就学支援の作業療法～不器用へのアプローチ～」

日時 平成30年11月16日(金) 午後3時30分～5時
会場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対象 保育園、幼稚園、療育施設、関係機関の職員のかた

～ 内 容 ・ 講 師 ～

中央療育センター 近藤 久美 主査(作業療法指導)

近藤 久美 主査は、現在は中央療育センターに所属されていますが、西部地域療育センターで、作業療法士として障害のあるお子さんと長年関わってこられました。連続講座でも度々講演されたり、保育士さん向け体験講座を開くなどして、支援にあたってこられました。今回は不器用なお子さんに対し、就学前にはどんなことを心掛けているのかなど、実践的なことも含めお話ししていただく予定です。

所長あいさつ

所長としてセンターに就任して、はや3年がたちました。

この間、子どもの発達に心配のあるご家族と接しながら、療育センターのあり方をいろいろと考えさせられました。当センターは地域療育センター1号館として開所してから25年になります。相談件数も年々伸び続け、発達に関するの悩みや相談内容も、より複雑になってきている実感があります。連続講

所長 宮地 泰士

座でも家族全体をどう支援するのが重要であるとお話がありました。自分たちが地域の中で果たすべき役割を十分果たしているのかを一人一人が見つめなおし、日々の支援につなげていきたいです。相談の予約もなかなか入りにくい状況ではありますが、皆様のご期待に沿えるよう頑張りますので、これからもよろしくお願いいたします。

ボランティア募集

保育場面での手助け(室内の活動、園外への散歩など)
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事(運動会、夏祭りなど)のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター

名古屋市西部地域療育センターだより 第39号

発行日 2018年9月

編集・発行 名古屋市西部地域療育センター

〒454-0828 名古屋市中川区小本一丁目20-48

Tel. (052) 361-9555 Fax. (052) 361-9560



この機関紙は古紙/パルプを含む再生紙を使用しています。